



染谷 茂

柏染谷農場

千葉県柏市船戸1788
電話04(7131)5598

利根川沿いの圃場で、「農業をやるなら、若い頃から自分で財布を握り、自分で借金もしないと、良い仕事はできない」

千葉県・JR柏駅から北へ車で5分ほど走ると、農産物直売所「かわで」に着く。300㎡弱の店内には同市産の多彩な野菜やコメ。他市町村や県外の農産物も合わせれば、生鮮品だけでも約50種類が並ぶ。

市内からの商品は朝採り出荷を基本とし、葉物などが売れ残った場合は、各農家が自分で引き取る。鮮度重視の仕組みが受け、休日は午前中から買い物客でにぎわっている。

「店から生産者に何を作れ、売れといった指導はしない。『みんな仲良

農業経営者ルポ / 第9回

大規模稲作に託す 農業・都市共生の夢

店名は消費者と生産者を「両の手のひら」になぞらえてつけた。他市からの来店も多い。



千葉県柏市の染谷茂はコメ中心に約60haを経営。さらにこのほど、休耕地120haの営農も手がけることになった。また農家だけで運営する直売所の経営者も務める。

首都圏のベッドタウンでは時に無力感を味わい、地域農業の将来を憂えてきた。その一つひとつへの答えとして直売所があり、大規模稲作への挑戦がある。

(秋山基)



コメは累積かくはん乾燥法でじっくり乾燥。慣行のコシヒカリは5kg2300円、有機栽培米は同3000円で直売する。



常温に近い風を大量に送って乾燥させたモミをそのまま貯蔵。温度や湿度の影響を受けにくく年間通して新米の香りがする。



「く」なんて昔の農協みたいなこと言ったらダメで、お互いしのぎを削らないと伸びていけないんだよ」かしわでを運営する1アグリプラスの社長、染谷茂は話す。

本業はコメ農家の染谷も、目下、店での売り上げトップの座を仲間の養鶏農家と競っている。安定的に売れる卵に対し、染谷のコメもちは、やや押され気味だ。おまけに、養鶏農家はカステラとマドレーヌも作り始め、その味が客に受けている。

「あのカステラには負けるなあ」からつと笑うと、「うちはこれから赤飯で殴り込みをかける。もち米には自信あるんだ」とうれしそうに続けた。競争を誰よりも楽しんでいるのは、社長本人なのかもしれない。

かしわでは昨年5月、オープンした。市内の農家15人が計4000万円を出資し、アグリプラスを設立。行政や農協に頼らない直売所経営を目指す。開店に際しては、アグリビジネス投資育成1からも同額の出資を受け、ほかに農林漁業金融公庫から1億1600万円を借り入れた。なにしろ、駐車場・店舗を合わせ、地代だけでも毎月120万円以上かかる。これに対し、売り上げは目標の1日180万円に達しておらず、「まだまだ売る努力が足りない」と、染谷の見方は厳しい。

「だけど、採算さえ取れるよつになつたら、地域農業の新しい流れが作れる。たとえば5億売れば、柏市内でそのお金が回ることになるし、消費地での農業のあり方を示せる」

農家だけで運営する直売所にかけたのは、30年間の農業人生を結実させたいという思いでもある。

跡取りから会社勤めを経て 改めて農業を選び直す

利根川を挟み、茨城県と接する柏市北部。広大な河川敷に沿って柏染谷農場は広がる。土地は肥沃な半面、大型台風などが襲うと増水に見舞われる。そのリスクを抱えつつ、約60haの大規模経営を続けている。

昨年の作付けは、コシヒカリを中心にコメ48ha、小麦10ha。ほかに水田の作業受託を15haこなした。コメは直売を重視し、約3300俵の収穫のうち、約2000俵を消費者相手に売り切る。5年前には、一部の圃場で有機認証を得ている。

「別に血眼になってるわけじゃない。気長に我慢しながらやってきた」染谷は自分の経営をそう振り返る。とは言うものの、遊水地での耕作は「年に一度の大博打」であり、実際に台風で自分のイネが水没していく光景を見たこともある。

他人と違っていたのは「ちょっと

大規模稲作に託す農業・都市共生の夢



利根川本堤防脇の旧ゴルフ場用地をクローラのジョンディア225馬力による陸引きでのプラウ作業。



播種機をセットして乾田直播に使うバーチカルハロー。条間30cm、株間16cmで、1カ所当たり3〜4粒の点播する。



稲ワラを鋤き込むブラソイラ。モミ殻も米ヌカと混ぜて堆肥にする。「人が食べるコメ以外はすべて田に返す」のがポリシーだ。

目線を高くし、周囲をキョロキョロ見渡したこと」だった。

「人から教わったり、モノまねをしてもらわない。言い換えれば、周りの農家たちがそれをしなかったから、自分が成長できたんだよな」

1949年、染谷は農家の長男として生まれた。周囲から「跡継ぎ」と見られながら育ち、農業を学べる高校に進学する。卒業後はすぐに親を手伝った。「それが当たり前だと思っていた」

3年後、転機が訪れる。付近に工業団地ができ、地元の人々が次々に勤めに出始めたのだ。当時、染谷家では水田1.5haを所有し、トマト、ニラ、ホウレンソウなども手掛けていた。しかし減反政策が始まると、先が見えなくなった。

「あの頃は親に言われた通りに働いていただけで、夕方が待ち遠しくらいだった。しかもコメが自由に作れなくなる。だったら、しばらく百姓をやめようと思った」

大型二種や大型特殊などの免許を取得していたのが幸いし、近くの工場に運転手として採用された。間もなく結婚し、農作業は両親と妻に任せ、勤め人暮らしは「のん気なものだった」と言う。普段は送迎バスや工場幹部の乗る車を運転し、日曜日は休み。

だが、3年半も続けていると、物足りなさを感じてきた。

「工場は大手企業の系列で安定していたし、忙しいってほどでもなかった。だけど、なんだか。毎日、同じことを繰り返しているうちに、これで悔いのない人生が送れるのかなと感じるようになった」

できることなら、もう一度農業をしたい。そう両親に伝えたが、「お前は給料を家計に入れてくれればいい」と猛反対された。それを振り切り、染谷は農業の世界に戻る。「最初の時とは違う。今度は自分で農業を選択したってことです」

受託で食いつなぎ 河川敷を切り開く

自分はどんな農業をしたいのか。何ができるのか。再び農業を始めるに当たり、染谷は思いを巡らせた。小学生の頃から無免許でバイクを乗り回し、初めてトラクタを見た時、「乗る農業」に心を弾ませた記憶があった。

「だから、農業をするなら機械を使ったかった。北海道に行つてジャガイモを作るのも一つの手だけど、あつちは寒そうだから。ここでやるとしたら、コメと麦しかなかった」

まず、所有していた乗用車を売り払い、貯金を切り崩して、3条刈り



プラウとの付き合いは長い。休耕地の耕起には5連を使用。葦の根が「プリプリ」と切れるようだ。



休耕地では、除草剤を使わないと葦の高さは4mにも及び、「キャビンから前が見えないほど」という。起こした後は、根が地表に現われる。

踏圧に配慮して導入したクローラトラクタ。直播に欠かせないレーザーレベラとの適応性も高い。

のコンバインと初摺り機を買った。使用効率を上げるために始めたのが、作業受託だ。兼業化の進行が追い風になり、「それでなんとか食いつなぐことができた」

運転手をしていた頃、ひそかに目をつけていたのが利根川の河川敷だった。手付かずで草茫々の景色を見ながら、「あそこにも土地があるじゃないか」と思っていた。河川事務所に出向き、「麦を播くから貸してくれないか」と頼んだ。しばらく

のコンバインと初摺り機を買った。使用効率を上げるために始めたのが、作業受託だ。兼業化の進行が追い風になり、「それでなんとか食いつなぐことができた」

「周囲から気遣い扱いされるからやめさせろって、うちの親に言うんだよ。確かにその頃、河川敷で農業なんて誰もやるうとしなかったんだけど」

この反対も押し切り、制度資金を借りて36馬力のトラクタとロータリを購入。その後、開墾用のプラウも揃えた。いかにも頑丈—徹なプラウを見上げた時は「化け物か」とあ然とした。葦や茅が生い茂る10haを切り開いてみて、そのパワーにまた驚かされた。

二度目の就農以来、染谷は常に分一人で考え、休耕地や不整地田でも引き受けて、田作りに明け暮れた。収入が少なければ生活を切り詰め、稼ぎがなくても、乾燥施設や精米施設を建てる方を選んだ。

「食うに困ってなかったら、冒険しなくてもよかったのかもしれない。でも自分は借金してでもやりたかった。好きなことやって生活が成り立つたら面白いと思っていた」

規模拡大と機械化がうまく絡み合うと、経営はようやく軌道に乗った。主食を作り続ける希望が沸き、農業に誇りをもてるようになった。ただ、その間に柏市は大きな変貌を遂

して許可は下りたが、これを聞きつけた親せきが実家に乗り込んでくる。

「周りから気遣い扱いされるからやめさせろって、うちの親に言うんだよ。確かにその頃、河川敷で農業なんて誰もやるうとしなかったんだけど」

荒んだ心を解きほぐした 農業の応援団

げていた。

柏市は都心から電車で約1時間の通勤圏内にある。交通網が整備されると、東京のベッドタウンと化し、バブル期には利根川周辺の道路も整備された。交通量の増加に伴ってひどくなったのが、圃場の周りに捨てられるゴミだ。ビン・缶は言うに及ばず、排水路に家庭ゴミを捨て去る人もいる。大きなイヌの死体が農道に置き去りにされていたこともあったし、麦畑に畳を100枚以上、投げ捨てていく業者までいた。

染谷は暗たんたる気持ちになった。始めは看板を立てて注意を呼びかけたが、効果はなかった。ゴミを拾い集める度に腹が立ち、時には空ビンを叩き割って道路にまき散らした。集めたゴミを袋に詰め、道に並べて抗議したこともある。

「ゴミのせいで、自分の心まで荒んでいった。多くの人はコメ作りを大切だと思っていない。農業は冒険されていると感じた」

農家同士で話し合いを繰り返したが、埒が明かない。無力感すらおぼえた時、染谷の胸中を疑問がよぎった。

「これは農家だけで考える問題な

大規模稲作に託す農業・都市共生の夢



研修生を含む5人が主な働き手。交代でトラクタを操る表情は明るい。「何も教えないよ。聞かれたら答えるだけ」と染谷。だが、大きな期待を寄せている。



休耕地の暗渠用に準備したモミ殻が、圃場の脇に大量に積み上げられている。暗渠にはコルゲート管を入れ、水田と畑作の輪作を計画している。



圃場近くを、間もなく「つくばエクスプレス」が走る。駅周辺はどんな姿に変わるのか。

のか。むしろ消費者に農業を理解してもらい、一人でも多くの味方を作ることが大切なのではないか」
ある日、隣の松戸市に住む知人から「コメ作りの体験をさせてくれなにか」との話があった。よい機会と考えて依頼に応じ、「農業の応援団になってほしい」と訴えた。
体験農業のメンバーはその後、「染谷さんちの米クラブ」の名でまとまった。冊子「あぜ道だより」を通じて、染谷は作物の生育状況などを会員に書き知らせ、田植えや稲刈りの時期には会員らが作業を手伝ってくれた。さらに93年の大冷害を機に、直売の顧客が一気に膨らんだ。「これからは、コメの価値を認めてもらって売る時代になる」。消費者とのふれ合いの中で、そう染谷は確信した。
有機栽培に取り組み始めたのも同じ頃だ。前々から農薬の魚毒性に不安を感じていたところ、顧客から「無農薬はないの?」と聞かれたのがきっかけとなった。一部の圃場で農薬の空中散布から外してもらい、それまでは処分していた稲ワラやモミ殻を鋤き込んでみた。紙マルチの使用、種子消毒から育苗までの無農薬管理と段階を踏み、一部の圃場ではあるが、認証を取得。昨年は2・7 haでコシヒカリを有機栽培した。

「雑草には悩まされるけど、欲しいという人がいる以上、やってみる。信用して買いに来てくれるお客さんは大事にしなきゃな」

嘆いても始まらない 自ら動ける範囲で動いてみる

染谷には、柏市南部で農業をする同じ年の仲間がいる。ネギの品質・収量が抜群で、果樹栽培でも優れた技術をもつ。4年前、その友人が「もうネギはやめた」ともらした。「中国産に価格がかなわないから」という理由だった。

同じ時期、農場の元研修生で、熊本県でコメとイグサを栽培する若者と電話で話した時のことだ。「経営を縮小し、自分は勤めにしました」と聞かされた。若者の周りでは経営難から3人が自殺したと知り、染谷は強いショックを受けた。

市内の農家を募り、「かしわで」の立ち上げに動き始めたのは、この二つの出来事があったからだ。

「農業も国際市場で勝ち抜けと言われても簡単にはいかない。国を当てにしても仕方がないし、困った、困ったと嘆いていても何も変わらない。じゃあ、地元の人に生産に見合った値段で買ってもらうおう、自分たちのできる範囲で地産地消を実現しようと考えた」



将来を担う従業員らと。「若い連中が一生懸命やれば、きっと夢がかなう」と染谷は言う。

直売所の成否は、少量多品目をいかに揃えるかにかかっている。現在直接出荷の生産者は市内に180人ほど。足りない品目はやむをえず市場から取り寄せているが、最近では

顧客が県外の農家を紹介してくれたら、「あそこつまいミカンがある」といった情報も寄せられる。

「近いうちに店内に大型ディスプレイを設け、生産現場の情報も発信したい」と染谷は言う。駅前百貨店への出店話も持ち上がったっており、生産者をもっと増やして学校給食に地元農産物を供給する構想もある。そして今、農業と都市の共生に向けて、もう一つの試みが動き出している。

最後の夢 120 haの休耕地にかけた

利根川本堤防と第2堤防に挟まれた休耕地をジョンディア8220T(225馬力)が5連プラウを引いて走る。交代で運転するのは染谷農場の従業員たちだ。雑草に覆われた土が次々と返されていく様子を染谷はじつと見守る。

70年代初め、あるゴルフ場開発会社がゴルフ場建設を計画し、この辺りの農地120 haを集めた。しかし、農振法の縛りや地元での反対で計画は宙に浮いた。土地は荒れ放題のまま、30年以上放置されていた。

今秋、東京・秋葉原とつくば市を結ぶ「つくばエクスプレス」が営業運転をスタートさせる。これに先立ち、市・県と地権者らが協議し、ゴルフ場会社の撤退と土地を有効活用

することが決まった。隣接する圃場をもつ染谷に協力要請があり、2003年1月、(有)柏みらい農場が発足。染谷は社長として120 haを任せられることになった。

つくばエクスプレスを巡って、染谷は以前から、地域のグループで話し合いを続けていた。自宅近くにも「柏たなか駅」が建ち、宅地開発されるのは目に見えていたからだ。

「そういう街作りではなくて、駅前に農地が広がるような農業と都市の共存はできないのか。田畑の緑が都市住民に潤いを与えるような街作りが可能じゃないかと思うんだ」

みらい農場では2年後を目途に10 haを超える市民農園の開設を目指している。駅から徒歩で行ける立地を生かせば、東京の間でも日帰りで土に触れられる。

残りの大部分ではコメ作りと畑作の輪作体系をとる計画だ。すでに一



染谷 茂

柏染谷農場

【プロフィール】

1949年千葉県柏市生まれ。68年高校卒業後就農し、いったん会社勤めをした後に再就農。現在はコシヒカリを主体にふさおとめ、もち米のわたぼうし、羽二重もちなどを作付ける。03年、利根川沿いの旧ゴルフ場用地を引き受け、(有)柏みらい農場社長就任。04年同市内に農産物直売所「かしわで」を起し、運営会社(株)アグリプラス社長。

<http://www.someya-farms.jp/>

部でジャガイモとタマネギを作り始め、地元中学生に収穫してもらって給食用に出した。一方、自分の水田では無代かきや乾田直播を試み、省力化への準備を進めている。昨年はパーチカルハローシーダーを使った点播で、予想以上の反当8・8俵を上げた。

それにしても、120 haもの農地を引き受けるからには、相当な覚悟が必要だったはずだ。すでに50歳を過ぎており、「本当なら引退を考慮すべきなんだよ」と染谷自身も苦笑する。

「でも、やっぱり可能性にかけてみたいんだな。どこまでできるか、先が見えないから夢だと思っただ」

120 haの夢とは、若手従業員ら後を継ぐ者たちに託す未来でもある。その夢が形となり、引退を決められる日が来れば、染谷は喜んで身を引くつもりでいる。(敬称略)